

【天気予報】

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	降水量 (mm)
2012年	4.4	8.1	0.9	69.0
2013年	5.8	9.6	1.9	32.5
2014年	6.0	9.4	2.8	77.5
1981~2010年	5.8	9.2	2.6	42.3

※気温については、1ヶ月の平均値

【作物】

麦 (裸麦・小麦)

1 土入れ

土入れは倒伏防止、無効分げつの抑制、根際の乾燥防止、雑草抑制に効果があります。本葉3~4葉期頃から茎立ち期(2月)までの間で、土が乾いている時に3回ほど実施して下さい。

2 麦踏み

麦踏みは根の浮き上がり防止、徒長防止、倒伏防止、根張り促進に効果があります。土入れ作業後に、土が乾いている時に実施して下さい(麦踏みの後に土入れをすると折れた茎葉を覆土し、生育障害を招く恐れがありますので、必ず土入れ作業後に麦踏みを行うようにして下さい)。

3 排水対策の徹底

湿害防止のため、排水溝の溝さらえをしっかりと行って排水の促進に努めて下さい。特に、排水溝は必ず圃場の外まで導いて、水が排水されるようにして下さい。

4 中間追肥

ドリル播栽培および全面全層播栽培で生育の悪いときは、分げつと生育促進のため1月下旬までに、生育状況にあわせて窒素成分で1.5~2kg/10aの追肥を行って下さい。

<真鍋>

【野菜】

1 サトイモ

(1) 土づくり

里芋は、根を広く深く張らせることが大切です。このような土壌は通気性が良く、酸素が十分含まれています。

そのためには、深耕と堆肥の投入を行って下さい。

ただし、圃場条件によっても異なりますが、鶏糞のような即効的に肥料効果が現れる堆肥を過剰に投入した場合、根傷み等を引き起こし、また、未熟堆肥を施用した場合、ガスの発生により生育不良になりますので、堆肥の種類、投入量、投入時期については注意が必要です。

(2) 乾腐病

長年の栽培による連作障害等の影響もあり、乾腐病の発生が見られます。

症状は、葉柄部横断面の導管が褐変し、芋を切断すると赤色の小斑点が見られ、症状が進むと芋がスポンジ状となります。

伝染経路は、土壌と種芋とがあり、病原菌は被害残渣とともに土中に残ります。

対策

ア 健全な種芋を使用して下さい。

イ 発生圃場は、4~5年の輪作、又は、バスアミド微粒剤30kg/10aで土壌消毒を行って下さい。



スポンジ状となった芋

2 タマネギ

冬期は、地上部(葉数・葉重)の増加に変化は見られませんが、地下部(根の伸長)は発育しています。根の発達に、追肥は大切な作業となります。時期は、早生系で1月上旬頃、中晩生系では1月中旬頃、NK化成特11号を40kg/10a施用して下さい。

3 ソラマメ

今月は、収量アップ、3粒莢率向上、害虫防除のための管理が必要です。側枝は6~8本を目標に、必要のない枝は順次除去します。また、支柱による誘引作業をすることで、株元に光が入り光合成能力が高まり、莢の肥大促進につながるため、行なって下さい。

害虫については、アブラムシによるウイルス病の感染に注意して下さい。

発生を確認した場合は、エルサン乳剤1,000~2,000倍、又はスミチオン乳剤1,000~2,000倍で防除して下さい。

<越智>

【果樹】

1 中晩柑類の収穫

収穫は、糖酸、着色など品質のよい外成りの果実から分割採取して下さい。一方、気象情報には十分注意し、積雪や低温が予想される場合は、急いで収穫して果皮障害や凍害などの被害回避に努めて下さい。収穫後の腐敗抑制のため、果実は丁寧に扱い、傷果や病虫害被害果を混入させないようにして下さい。

2 予措・貯蔵

温湿度を適切に管理し、腐敗防止と品質維持に努めて下さい。

(1) 宮内伊予柑

適正入庫量(0.8~1.0t/坪)を厳守し、庫内空気の循環に配慮して下さい。階級別に区分貯蔵し、ス上がりしやすい大玉果(3L以上)は短期貯蔵とします。貯蔵条件の目安は、短期貯蔵で温度8~9°C・湿度85%、長期貯蔵で温度6~8°C・湿度80~85%です。

(2) 不知火

予措は、風通しの良い軒下や開放した貯蔵庫で3~5%を目安にゆっくり(3週間程度)行います。貯蔵条件の目安は、温度6~8°C・湿度80~90%です。乾燥するとコハン症の発生を助長するので、新聞紙等で包みます。

3 害虫防除

冬期マシン油乳剤散布は、ミカンハダニ、カイガラムシ類に高い防除効果が期待できます。葉裏及び樹冠内まで丁寧にムラなく散布することで、これらの越冬世代の密度を低下させて下さい。

散布日は、収穫後~1月中旬に、厳寒日を避けて選びます。なお、冬期に2度散布しないことに注意し、1月中旬までに散布できなかった場合のみ、2月下旬~3月中旬頃の発芽前に散布して下さい。

<大西>

【花き・花木】

1 シキミ(越冬害虫防除)

機械油乳剤95(40倍)を散布します。越冬害虫を防除し、発芽期のダニ類の発生を抑えます。防除時期が遅れないよう、芽が動き出す前に散布して下さい。

2 ラナンキュラス(球根養成栽培)

元肥(よりりん60kg/10a、苦土石灰100~120kg/10a)の施肥と、畝立て(畝幅120~130cm)を行って下さい。

定植は、株間と条間はそれぞれ10cmで、1株2~3本植え(5~7万本/10a)とし、密植を避けます。

定植30日後(根が活着したころ)、土寄せを行いながら、くみあい化成2号60kg/10a(窒素成分5.4kg/10a)の追肥を行って下さい。

3 アネモネ

追肥は、本葉が2、3枚見えはじめてから行います。くみあい化成2号50kg/10a(窒素成分4.5kg/10a)の追肥を行って下さい。

<日野>

【畜産】

豚流行性下痢(PED)の防疫対策のポイント

本病の防疫対策は飼養衛生管理の徹底が基本です。

(農場への病原体侵入防止対策)

1 農場への豚、人、車両、作業器具等の出入りを厳密に管理し、農場の出入り口等での車両等の洗浄・消毒を徹底する。

2 豚導入時に導入豚を2~4週間、隔離・分離するように工夫し健康状態を観察する。

3 訪問者を受け入れる場合には、農場専用の履物と衣類を準備し、衛生管理区域に立ち入る際には着用させる。

4 畜産関係施設に出入りする作業員や車両の洗浄・消毒を徹底する。

5 特に分娩舎内へのウイルス持ち込みを防ぐため、分娩舎では専用長靴に履き替え、専用衣類に着替える。

6 野生動物の侵入防止対策を徹底する。

※飼養豚の観察を徹底し、通常と異なる下痢、嘔吐、食欲不振、死亡等の症状が確認された場合には、直ちに家畜保健衛生所に通報して下さい。

<中谷>